

ハプスブルク家異聞（その四）

バーベンベルク家（前編）

——ドナウ辺境伯領——

幅 健 志

「ドイツのイーリアス」ともいわれる英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』に、リュエデゲールなる騎士が登場する。この勇士はベヒエラーレン辺境伯と呼ばれ、ドイツ人でありながら、フン族の王エッツェルにつかえる身である。英雄ジークフリートの寡婦クリエムヒルトを妃にと所望する主君の命をうけ、ドナウ河畔はハンガリーの地からはるばるブルグント族の都、ライン川をのぞむヴォルムスの町まで出向いたかれは、首尾よく話をまと

めたのち、壮麗な輿入れ行列を先導しながら、高貴な女性を主君のもとに送り届けるといった名誉な役をふりあてられている。それだけではない。辺境伯リュエデゲールは、女主人との誓約のために我が身を挺し、花と散る悲劇の武将、騎士の鑑としても描かれ、きら星の如く居並ぶ数多くの『ニーベルンゲン』の勇士のうちにあつて、ひとときわ燦然と輝いているのだ。

リュエデゲールの悲劇は、ブルグントの姫に異郷への

旅立ちを決意させようと、彼女に終生の忠誠を誓ったことによる。この誓いが災いとなって騎士の身にふりかかってくるのだ。クリエムヒルトは新しい夫、フン族の王を頼みに、奸計にかかり命を落としたジークフリートの恨みをはらそうと密かに考えていたからである。

異国の王に嫁してから拾数年、エッツェル王との間に王子すらもうけたクリエムヒルトだったが、亡き夫ジークフリートの仇をうとうとする執念は消えない。ついに王妃はブルグントの一族郎党をハンガリーに招き、めざす相手をしとめようとたくらむ。妹御をめぐる不穏なうわさもヴォルムスまで届いてはいたが、兄王や弟公は騎士の面目にかけ、また肉親の情を信じつつ、禍々しい招待をうけてしまう。かくしてきらびやかな隊列を組んだブルグントの騎士の一団が、ラインの地を出発し、ドナウ流域にけんらんたる武者行列を展開することとなった。このときも辺境伯はその昔ブルグントの姫君をもてなしたように、一行を歓待し、騎馬試合や饗宴の大いな

る喧噪が、ドナウ河畔の草原にわきあがる。しかも辺境伯の娘とブルグント王家の若武者との婚儀さえとり行なわれるといった豪華さである。名残を惜しみながら勇士たちは再び騎上のひととなり、辺境伯の案内でエッツェルの王都へと進んでゆく。しかしかれらが王宮に着くや、クリエムヒルトは一行のなかに混じる夫殺しの下手人を引渡すように申し入れのだ。兄王や弟公らが殺害人とはいえ親族にして重臣たる者の捕縛を拒んだとき、復讐に燃える王妃は客人らを皆殺しにしても思いを遂げようとする。かくして喜ばしい再会と宴の場になるはずの王宮は、ブルグント族と王妃の手の者との死闘で、無残な修羅場と化してゆく。

騎士リュエデゲールも、女主人への誓いに縛られ、客人として歓待し、ひとり娘を嫁がせもしたブルグント一族に戦いを挑まざるを得ない。主君への忠誠か、それとも朋友への信義か、選択を迫まれた辺境伯は、あるじの命令が理不尽と知りつつも、誓約の遵守に命をかけ

る。朋友にむかい剣をぬかざるを得ない我が身の不運にはらはらと涙しながら、この勇士はブルグントの王族のひとりと激しくわたりあい、あっぱれ相討ちの最期をとげることとなる。しかも、かれの首を刺しつらぬいたのは、ベヒェラーレンでの饗応の際、引出物として相手に贈ったひと振りの太刀だったのである。

不死身のジークフリートの冒険譚に熱中する者たちにとっても、主君の命に殉じ雄々しく散ってゆくリュエデゲールの姿はきつと深い感動を伴うものであったに相違ない。『ニーベルンゲンの歌』で非業の最期をとげる者らは、狂気に駆られた王妃を筆頭に、なんらかの誤ちを犯しているものと解釈され、かれらの末路はいわゆる因果応報といった枠内で処理できよう。だが英傑リュエデゲールの死は、ただひとえに主人への誓約なる一点にかかっている。それゆえに、このオーストリアの地に居城をかまえていたベヒェラーレン辺境伯は、「騎士の華」とたたえられ、封建社会の倫理観に多大の影響を投げかけたのだった。

この英雄叙事詩の作者と成立年代は、未だ確定されていない。しかし研究者の多くは、比較考証の作業を通じて、一三世紀初頭と割りだすようだ。さらにこの作品には、当時吟遊詩人の語りや部族伝説のかたちで、ドナウとライン流域に流布していた伝承が、数多く取りこまれている事実も確認されている。不死身の『ジークフリート』冒険譚、西暦四三七年滅亡のブルグント王国とフン族の王アツチラをめぐる伝説、東ゴート族のテオドリック大王の事蹟などを主な下敷としながら、『ニーベルンゲンの歌』の作者は、これらの素材を変形・整合し、英雄ジークフリートの武勇と非業の死、さらにかれの妃クリエムヒルトの復讐という首尾一貫した戯曲的構成を誇る長編叙事詩をつむぎ出したのである。

こうした長大な作業には、奔放な詩的イメージより、むしろ全体的な調和を乱さず語りきるといった采配の能力が求められよう。この要請をうけて立つのが、作者の

持ちあわせるドナウ流域の地形に關した確かな知識である。これこそが作品の構成に見事な枠組を与え、物語の流れをさばき、筋の逸脱を許さぬ威力を発揮しているのだ。ブルグントの姫の興入れ行列や兄王らの騎行は大河の流れに沿いながら、パッサオ、エファデング、トライゼン、ペヒラルン、メルク、マウテルン、トライスマウエル、トゥルン、ヴィーンなどの町を通過し、さらにエツツェルの王宮があるグラン、もしくはブダペストまで、整然かつ豪奢に続いてゆく。地名や地勢の取りちがえからして、恐らくライン方面は知らないと見られる作者が描きだすジークフリートの姿は、神話の霧のなかに浮かびあがるが、ドナウ岸边に舞台がうつるや、作品の世界は見事な迫真をおびてくる。こうした事実と英傑リユエデゲールに対する詩人の思い入れに、研究者が不詳の作者の身元を、オーストリアはドナウ河畔の人としたいとするのも無理からぬところだろうか。

※ ※ ※

辺境伯リユエデゲールの居城はベヒエラーレン、現在のペヒラルンの町にあったとされている。かれの主君エツツェルの領国はエンス川でバイエルンに接し、ここからドナウ下流に広がる。したがってドナウに南から注ぎこむ支流エンスが国境だったわけで、この勢力分布を史実にかさねあわせるかぎり、『ニーベルンゲンの歌』の作者は、叙事詩の舞台を一〇世紀に移行させていることになる。だがこの時代エンス川以東の地を支配していたのは、エツツェルのフン族ではなく、ハンガリーに本拠を置くマジャール族だった。

ブルグント族とフン族の接点は、四三七年にローマ軍団がブルグント王国を攻めた際、フン族の加勢を得た歴史的事実にもとづく。しかもアッチラが権力の絶頂にあつて突然変死したことから、王は滅されたブルグント王家の娘の報復をうけたのだとの伝承が派生したものらしい

い。六世紀の人ヨルダーネスのゴート史には、蛮族の王はひとりの美しい娘を後宮となし寝所にはいったが、翌朝になっておびただしく血を吐いた姿でときれているのが発見され、死体のかたわらにはかの乙女が泣き伏していたとの記述がみえる。アッチラの死は泥酔の上の卒中死だろう。また『ジークフリート素材』に対し、『ブリュンヒルデ素材』と呼ばれる古い伝承では、ブルグントの王妃は殺された兄弟と、略奪された財宝ゆえにフン族の王に復讐するという内容が読みとられ、いずれにしても民族大移動期の激動がこだまする伝承のなかでは、両族の因縁譚は深く定着していたらしい。

『ニーベルンゲン』で注目すべきは、エッツェルの扱いは方で、ヨーロッパの国々にあつては災厄をもたらす「神の答」として恐れられたフン族の王が、その描出には多くのあいまいさが残るもの、キリスト教に対して寛大な、高潔の士として登場している点だろうか。これに関して、他民族の異質文化に触れる機会が多かった

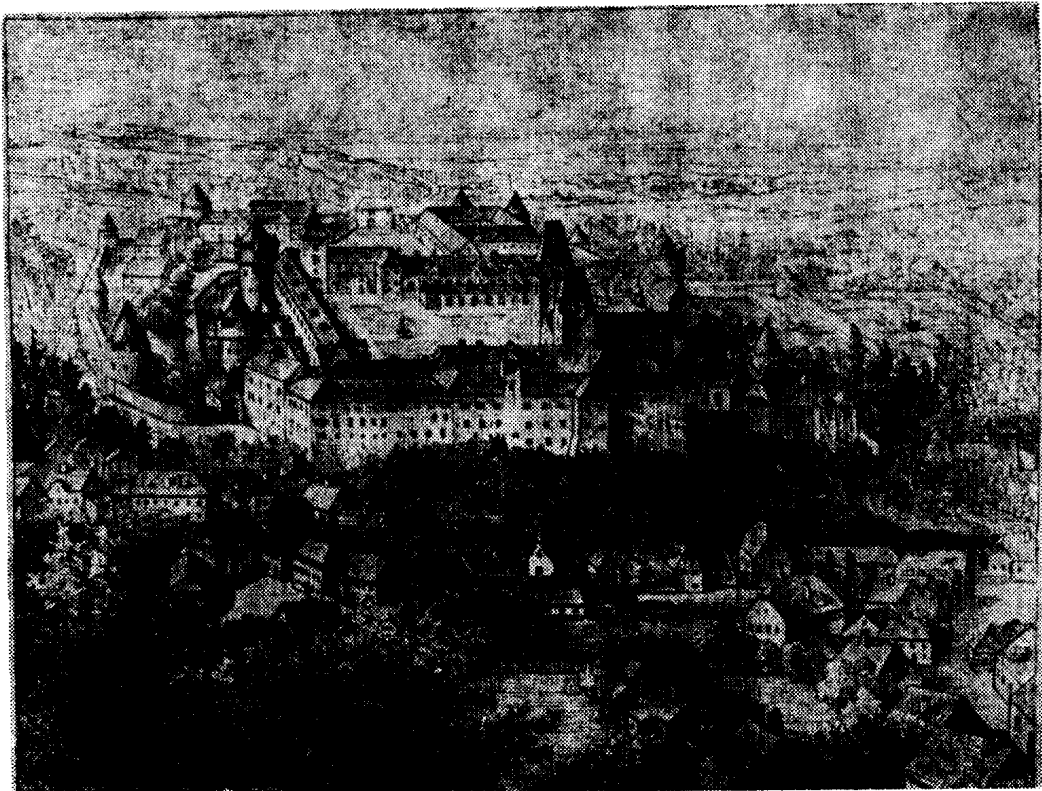
オーストリアの特殊性を指摘するムキが強い。ノイズィードラー湖畔の生れとされ、西ゲルマンのオドアケルを敗死させた英雄テオドリック大王に関する叙事詩においても、アッチラは大王の亡命を助ける勇者として現われ、古くから民衆にはなじみ深い存在だったようだ。テオドリックはディートリヒ・フォン・ベルンなる呼び名で『ニーベルンゲン』でも大活躍。かれはフン族の助っ人として、クリエムヒルトの求めてやまぬ仇を打ちまかす豪の者、ここでもやはり追放の身を、エッツェル王の庇護にあずけている。ヨーロッパ世界が異教徒に対する寛容の精神を学びとるには、とてつもなく長い年月が必要だったが、ここドナウ流域では、少々趣きを異にしていたようである。

さてリュエデゲールの辺境伯領は、エンス川に始まってトライゼン川に終わるが、実はこの地帯かのカール大帝によって、フランク王国につけくわえられた歴史を持つ。当時パンノニアと呼ばれていた西ハンガリーを中心

に一大勢力を誇っていたトルコ系遊牧民・アヴァール族を、大帝は二度の遠征でグランまで追い払ったのである。

ゲルマン民族の移動の最終段階、西暦五六八年、パンノニアの地からランゴバルト族がイタリアにむかったあと、この空白地帯にアヴァールとスラブ、そしてゲルマン系のバイエルン族がはいりこむ。東からはアヴァールが、北からはスラブが、西からはバイエルンが進出したわけだ。とりわけバイエルン族は、パンノニア布教に乗りだした教会と手を携えながら、精力的に植民活動を展開する。バイエルンの地がキリスト教化されたのは六世紀中葉、やがてレーゲンスブルクにはエメラーン、ザルツブルクにはループレヒト、フライズィングにはコルビニアーンなどの有能な聖職者が現われ、歴代のバイエルン部族公はかれらを手厚く保護した。「バイエルンの使徒」と称される聖ループレヒトは、ヴォルムスから招かれた人物で、六九六年には、時の部族公からザルツブル

クを贈与され、後の大司教座の基礎を置いている。



16世紀頃のクレムスミュンスター修道院

オーストリアの地にも教会と修道院が現われ、バイエルのオジロ公はザルツカマーグートにモントーゼ修道院を、タシロ三世はマツトゼーとクレムスミュンスタールを建立。ザンクト・ペルテン、ザンクト・フロリアンの開基もやはり七世紀までさかのぼるといふ。したがってカール大帝の東征以前にヴィナー・ヴァルトの西側までは、かなり開墾事業が進んでいたのだった。ことに上オーストリア州は、はやくもバイエルの勢力下にあったと考えてもいい。ただし下オーストリアは、この時期に由来する河川や集落名からみてバイエルン、スラブ両族の混在地帯だったようだ。

アヴァール族はドナウ中流地帯を舞台に、五世紀頃から激しく活動していた。かれらはフン族、ブルガル族、そしてメーレンのスラブ系住民を支配下に置き、ビザンツ帝国領にも侵寇。東方の帝国は貢納金で、かれらをなだめすかせる。ようやく基礎固めを終えたばかりのフランク王国にとっても、この騎馬民族の存在は大きな脅威

だった。西暦七三三年、教皇の命を奉じてイタリアに進軍したカールは、ランゴバルト王国を倒したのち、バイエルのタシロ三世公を屈服させ、一族を修道院に幽閉したが、これによってかれの王国は直接アヴァールの勢力圏と接してしまふ。バイエルンなる緩衝地帯がなくなってしまったわけだ。ドナウ兩岸に展開された第一回の東征は、敵の本拠をつくに至らなかったものの、大帝の子ピピンが率いた次回の攻撃は、ドラウ河方面からなされ、大戦果をあげる。ピピンは幾重もの土塁と柵がめぐらされた「環状の砦」を次々と撃破し、ビザンチン貨幣や宝石、金や銀の器、装飾品、刀剣類や絹などおびただしい財宝を収奪し、アーヘンに凱旋した。

アヴァール族の討伐によって、新たにフランク王国の一部となったこの僻遠の地に、カールはいくつかの辺境伯領を配し、領国東南地帯の守りとする。そのうちのひとつ、ドナウ河に沿った一帯はドナウ・マルクと呼ばれ、国王の任命した辺境伯が王領地を管理しながら、最

高軍事権を行使した。さらにカールは、アクウェリア総大主教とザルツブルクの縄張り争いを調整し、ドラウ川を両者の境界線としたが、その折パッサオ司教区としてほぼ現在の上・下オーストリア両州にあたる領域をふりあてている。大司教の管轄下に置かれたのはザルツブルク、シュタイエルマルク、ケルンテン、ティロール各州だった。しかし、パッサオ司教区とはいっても、決してその統制が一円的にゆきとどいたわけではない。たとえばウィーンで最も古く、カール大帝建立の伝承もあるザンクト・ペーターや、バーベンベルク一門がこの町の支配者におさまる以前に建てられていたとみられるループレヒト教会などは、長い間ザルツブルク大司教の系列下にあった。

パッサオ教区内に含まれたオーストリアは、まだドナウ両岸に带状の狭い耕地が現われていただけで、大方は森林と原野だった。人の手がいっていかない領域は、すべて王の所有とみなされたが、国境も定まらぬ時代のこ

とだから、はたしてこの王領地どこまで広がっているのか誰にもわからぬ代物だったともいえよう。カロリング朝の時代、ドナウ流域の王領地が、つぎつぎと教会関係者とバイエルンやフランケン系の有力貴族に払いさげられ、ヴィーン盆地までの進出はかなり遅れたものの、植民と開墾の事業は進み、やがて先端部は、メルクからクレムスに至るヴァハウ峡谷を経てトゥルン盆地まで伸びてゆく。ことにヴァハウの黄土層の山膚は、ブドウ栽培に適し、パッサオ、ザルツブルク、フライズィング、レーゲンスブルクなどの司教座系の教会や修道院によって開かれた荘園が散在していた。交易と防御施設としての町並も現われたが、ほとんどはローマ時代の遺構のうえに築かれている。かつてのローマ街道に沿い、エンス、イプス、ペヒラルン、メルク、マウテルン、ホレンブルク、トゥルン、ヴィーンと、『ニーベルンゲンの歌』でなじみ深い町が点々と続く。こうした町は当初王領地として代官級の官吏が置かれていたが、やがて役職は有力



一門の世襲するところとなり、町の支配権すらいつの間にかかれらに握られてしまったらしい。

カール大帝なきあとの王国分裂の結果、東国地帯は東フランクのルードヴィヒ・ドイツ国王の統制下に入り、この大帝の孫の死後さらに細分化され、バイエルンとケルンテンはルードヴィヒの三人の息子のひとり、カールマンが手にする。カールマンの庶出の息子がノルマンやスラブと戦い、ドイツ国王位をものにしたアルヌルフ・フォン・ケルンテンだったが、久方ぶりに登場したこの強力な国王の手にすらあまる恐るべき敵が、ハンガリーの地に出現しつつあった。マジヤール族である。

九世紀末、黒海沿岸からドナウとティサ河とはさまれるハンガリー平原に移動してきた騎馬遊牧民族マジヤールは、アヴァールなきあとの間隙をつき、スラブ系諸民族を圧しつつ、一〇世紀前半期、恐るべき脅威をヨーロッパ全域にふりまく。国内の分裂で力を結集できないドイツは無論のこと、イタリア、北海地方までその馬蹄

にふみにじられた。かれらは部族単位の騎馬集団となつて平野をよぎり、峡谷をぬけ、隘路をめぐっては神出鬼没、住民を拉致し、家畜や食料を奪い、強奪品を満載しては故郷にもどり、再び獲物を求めては四方へくりだしてゆく。マジヤール族は、ビザンツ帝の対ブルガリア戦の傭兵として利用された折り、略奪のうまみを覚えこんだのだと云われる。

八八一年、ついにかかれらはオーストリアの地に出没。「ヴィーン附近」でバイエルンと干戈を交えたとの「ザルツブルク年代記」同年の条を皮切りに、その後半世紀以上にわたり、ヨーロッパの歴史資料はマジヤール禍に呻吟する悲惨な記述で溢れかえる。歴戦の武将、国王アルフ・フォン・ケルンテンもかれらの騎馬隊には歯がたたず、貢納金で馬首をバイエルン以外の地に向けてもらうほどだったから、その子ルードヴィヒ幼童王の時代には、蛮族の跳梁になすすべもない状況だった。バイエルン系の辺境伯レオポルトが一度リンツで反撃に成功

したもの、九〇七年深く踏みこんだプレスブルクで大敗を喫してしまう。レオポルトをはじめ、ザルツブルク、フライジング両司教や多数のバイエルン貴族らがそろって討死という惨憺たるもので、この結果エンス川までの大河流域は無論、全パンノニヤ、カラントーニエがマジヤールの制圧下におかれる。しかしカール大帝以来百年余りにわたる東部地帯の経営が、すべて水泡に帰したのではなかった。異教徒に寛大な遊牧民だったから、教会もなんとか存続し、『ニーベルングの歌』の辺境伯のように、マジヤールから封土を受けたドイツ系貴族もいなかったとは云いきれないようだ。

＊ ＊ ＊

全欧を荒しまわるマジヤール族に、とどめの一撃を加えたのはオットー大帝だった。そもそもザクセン王家の台頭はマジヤール戦における功績によるとみて差しつかえない。ルードヴィヒ幼童王が若冠十八歳で死去し、東

フランク王国にカロリング朝の系譜がたたれたとき、ドイツ諸侯はフランケン公のコンラートを国王に選出した。ザクセン、シュヴァーベン、バイエルン各地にはそれぞれに強大な部族公が割拠し、コンラート一世はノルマンの侵攻にもマジヤールの跳梁にも無力で、その治世はほんのエピソードに終わってしまう。しかしこの国王、臨終に際し、弟公の野望をしりぞけ、ザクセンの梟雄ハインリヒ、つまりオットー大帝の父親を後継者に指名。今にして思えば大英断だった。ハインリヒ一世の国王就任は、当初シュヴァーベンとバイエルンの支持を得られず、新国王にとっても対マジヤール問題は先任者と同様、命取りになりかねない状況である。

九二六年、またもやマジヤールの略奪部隊が姿をあらわす。ザクセン勢は苦戦した。馬をあやつる術にたけたこの精悍な遊牧の民は、突然地底から湧き上がったごとく出現し、みるまに数を増しながら、襲いかかってくる。恐るべきは、疾駆する馬の背から放たれる矢だっ

た。剣も槍もとどかぬ距離から、飛道具で攻撃されては勝負にもならず、物影に身をよせて防戦するのがせいぜいのところ。機動力の点ではるかに優る敵の追撃など思いもよらない。ところが国王はたまたま捕虜にした敵の大物を交渉の席につかせ、貢納金で九年間の休戦を買いとる。

マジヤールの軍勢が、砂ぼこりをまきあげながら退却してくれたあと、捲土重来を期したハインリヒは、各地の砦や町の防備施設を強化させ、同時に騎馬軍団の養成にとりかかった。三圃農業がはじまったばかり、収穫も多く望めない当時の状況では、軍馬の飼育や調教は多大な犠牲を伴ったとみななければならない。馬そのものも少なかったし、装備の方も高くついた。さる試算によれば一頭の軍馬は雌牛四十五頭分、雄牛二十頭分にあたったとされる。しかも通常ひとりの騎馬武者には、戦闘用の馬に加え、行軍用と従者用の計三頭がつく。領主はさておき、富農ふぜいでは手が出ない。そのうえ馬を駆って

の戦闘ともなれば、自分の足で駆けずりまわり、鋤鋤を持つ手に剣を握るような武芸では間にあわない。いざ合戦にそなえ、日頃の訓練が不可欠だった。やがて歩兵らの頭上には威圧するがごとく、騎馬武者の堂々たる姿が見られるようになる。鉄の塊と化した騎士とその背後に霞む歩兵という凶柄こそ、騎馬軍団創設に伴う中世社会の階層分化をうつつしだすものでもあった。

ハインリヒ一世の策は実をむすぶ。約束の期間がまだ三年残っていた時点で、貢納品を受けとりにきたマジヤールの使者を追い返したのだ。激怒した敵はさっそく略奪部隊を送りこみ、国王の拠点ザクセンにむかう。チューリングエンとの国ざかいでこれを迎えうったハインリヒは、相手を敗走させる。重装備のドイツ騎馬軍団を見ただけで、おじけづいた敵が早々に遁走したというのが事の真相だったらしいが、ここにザクセン王家に対する信望は高まり、オットー大帝出現への決定的な布石が敷かれたのである。

西暦九五五年八月、アウグスブルクの町がマジヤール族の餌食になろうとしていた。雲霞のような大軍が、ローマ時代建造の粗末な囲壁にむかって波状攻撃をしかける。「地裂け、天落下せずば、かなうことあたわず」と年代記作家が記す絶望的な状況のなかで、司教ウルリッヒは甲冑もつけず馬にまたがり、兵と市民を鼓舞、二日間にわたる攻防戦をもちこたえる。三日目、まさしく天の配剤か、オットーがバイエルン、シュヴァーベン、フランケン、ボヘミア勢からなるドイツ軍団を率いて現場に到着。緒戦では、大きく迂回作戦をとった敵の分隊に、ボヘミアの輜重隊が不意をつかれ混乱したが、オットーは藪や繁みが多く、しかも起伏の激しい地勢を生かしながら、次第に戦局をたてなおし、女婿ロートリンゲン公の奪戦に助けられ、ついに決定的な勝利をつかむ。決戦前日を祈りと禊にあてたとも云われるキリスト教軍団の攻撃は執拗で、敗走する敵を追撃し、隠れひそむ者らを駆りだし、幾万とも知れぬ邪教徒を殺戮するすさま

じさだった。ただ七名のマジヤール兵だけが、耳と鼻をそがれた哀れな「ヒオブの使者」の姿で故郷にたどりついたとされている。このカール・マルテルのサラセン撃退の快挙にも比せられたアウグスブルク近郊レッヒが原の合戦が、オットーに皇帝の座をもたらしたのである。しかしこの時点まで、オットーの国王座も安泰という形容にはほど遠いものだった。かれは帝国支配の方法として、大公職や高位聖職者の地位に、親族を配する家長的な統治形態をとったけれども、これが裏目に出てしまう。身内の者たちの反乱である。大帝の父親が国王に選出されたとき、プレスブルクでの対マジヤール戦で討死をしたレオポルト辺境伯の息子・アルヌルフ公は、地元バイエルン貴族の後押しで、対立国王に選出されるほどの勢力を擁していた。ハインリヒ一世もバイエルン公に国王の称号を断念させようと、公領内の司教任免やボヘミア・ハンガリーに対する自主外交の特権を認めざるを得なかったという。アルヌルフ公はドイツ王の宗主権

を無視し、息子のひとりの後継者に定めたが、オットー大帝はこれを認めず、九四七年、公の娘と結婚していた弟ハインリヒをこの地に送りこむ。このハインリヒ公、これまでに幾度となく兄王に反抗し、手をやかせた前歴をもつ問題の人物だった。兄の地位を欲しがるハインリヒは、その昔大帝の父親のもとに、王国の神器を届けたコンラート一世の弟・フランケン公やロートリンゲン公らと語らい、兄王に反乱。騒乱の渦中で兩名は命を落としたが、主謀者のハインリヒはのうのうと生きのびる。もつともオットーがフランケンを王家の直轄領とし、ロートリンゲンに女婿赤毛公を配せたのも、不肖の弟の軽挙ゆえだったかもしれない。さらにこの弟御は、国王暗殺の機会をうかがい、事が露顕するや逐電、その後兄の足元に身を投げだして許しを請うたとも伝えられる。

レッヒが原の決戦につながるマジヤール族の侵寇は、ドイツ国内の混乱にも原因があった。餌をちらつかせて蛮族を帝国内に誘いこんだのは、ドイツ側だとの見方す

らある。この九五四年という時期、オットーは長男と女婿ロートリンゲン公の蜂起に苦しんでいる。大帝は鳴りものいりでブルグントの王女と再婚したが、先妻の子・シュヴァーベン公ルイトポルトが自分の帝位継承に危惧をいだく。しかもバイエルンが叔父の手に渡ったこともあり、皇子は義兄と組んで反乱の火の手をあげたのだ。兩名はマインツに立籠り、突如バイエルンの首都・レーゲンスブルクを占領し、徹底抗戦のかまえを捨てない。バイエルン貴族、プアルツ伯、ザルツブルク大司教の面々も反徒の側にたち、国内は分裂。和解の交渉が何度か繰り返されたあげく、首謀者ふたりは王弟と同じように服従を誓い、事態はなんとか収まった。親族を罰せず、常に犠牲を共犯者のなかに求めるのがザクセン王家総帥のやり口で、このときはザルツブルク大司教が、バイエルン公により眼をつぶされたうえ追放の憂きめをみている。反逆者一味の詮議の際、マジヤールとの内通問題が焦点となり、双方の激しい応酬がつづく。事の真相

は定かではない。しかし両陣営ともに蛮族の矛先を相手側にむけようと、画策した形跡はあったようだ。なお大帝の長男は父親のイタリア遠征につきあい落命、女婿ロートリンゲン公の方は、レッヒが原で獅子奮迅の働きをみせたのち、惜しくも敵兵の矢に倒れている。

オットー大帝と弟公の確執は、次の世代まで持ちこまれた。大帝の後継者オットー二世と、弟公の子ハインリヒと喧嘩公との争いである。喧嘩公はボヘミヤやポーランドと結び宗家に反抗。オットー二世はバイエルンの勢力をそぐため、広すぎる公領から南東部を切りとり、新しい公領を創設した。カラントーニエンなる名にちなむケルンテンで、これはオーストリア共和国の領域内に生れた初めての公領だった。バイエルン公領はここに縮小をみたが、喧嘩公の息子は、宗家のオットー三世が世継ぎなく死去したあとをうけハインリヒ二世として登極。またケルンテン公領はロートリンゲン赤毛公の遺児に封土され、娘をとおしてとはいえ、大帝の高貴な血をうけつ

ぐこの一門からは、コンラート二世が誕生し、ハインリヒ三世、四世、五世と続くザリエル朝を開始することとなる。

＊ ＊ ＊

バイエルン公領の縮小や、ケルンテン公領新設と関連し、ドナウ流域のオーストリアにも重大な動きがみられた。これまでドナウ・マルクはバイエルン公の宗主権下にあり、マジヤール族の駆逐以来、幾人かの辺境伯がこの地に任じられていたが、隣国バイエルンの反乱はオーストリアをも巻きこみ、ときの辺境伯は喧嘩公に加担し、失脚の憂き目を見たのである。オットー二世は帝国の中樞からとうく離れてはいるものの、国境警備と国土拡大の任務を遂行すべきドナウ・マルクの辺境伯に、信頼のおける人材を据えようとする。抜擢されたのは、二七〇年の長きにわたりこの地に君臨することとなるパーベンベルク家の始祖・レオポルト一世だった。西暦九七六年

のことだったとされる。このときまでのバーベンベルクの系譜はつまびらかではない。しかしドナウとボヘミアの森に囲まれるフランケン地方に家領を有した一族とする説が無難なようだ。

始祖レオポルトには、オットー大帝にまつわる出世譚が伝えられる。真偽は別として話はこうである。あるとき大帝は森で狩りをしていた。ところが大熊の逆襲を受け、槍はくだかれ、弓の弦は切れてしまう。もはやこれまでかと思われたとき、ひとりの若い騎士がすばやく自分の弓を投げ与え、からくもオットーは猛獣を射殺すことができた。大帝は若者に恩賞を約し、後日のあかしとして、弦の切れた弓を下賜する。この約束は大帝の生前には、実現しなかったものの、かれの子オットー二世が、これをはたしたというわけだ。

バーベンベルク家の初代にまかされた辺境伯領は、エンス川からヴィーナー・ヴァルトの西側、トライゼン川までの狭いドナウ流域にすぎなかった。最初の拠点はず

しくもリュエデゲールが館を構えていたとされるペヒラールン。この町の歴史はドナウ河畔に点在する他の町と同様、ローマの時代までさかのぼる。ローマの支配がノリウムまで及んだ紀元前一五年、エルラウフ河口のこの町には水軍基地が置かれた。しかし民族移動の嵐には打ち勝てずに放棄され、残骸に近い姿をさらしながら、ゲルマン諸部族やスラブ、アヴァールに滞留の地を提供してきたようだ。カロリング王朝の分裂期、東フランク王ルードヴィヒ・ドイツによりこの町は、レーゲンスブルク司教に贈与され、周辺部の開墾が進む。一〇世紀、マジヤール族の勢力下にはいつていた時期が、『ニーベルンゲン』の背景と重なる。しかしはたしてここにリュエデゲールのような領主が存在していたのかどうかは憶測の域を出ない。

バーベンベルク家は、じきにメルクに本拠を移す。この要害の地の獲得も、始祖レオポルト伯の手柄とみられる。ドナウの流れに洗われる断崖にそびえ立っていた岩

を伝承はマジヤール族の前進基地としているが、史家はバイエルン喧嘩公に加担した辺境伯がここに立籠り、レオポルトに攻略されたのだと理解するようだ。バーベンベルク家の拠点が、メルクに移ったあと、ペヒラルンの町は再びレーゲンスブルク司教領となった。つまり司教座は、マジヤール禍の五十年にわたる混乱にもかかわらず、ザクセン王朝によりカロリング時代からの既得権を安堵されたことになる。この種の事例は教会領に多く認められるが、一般の豪族領でも、所有権の連続性はある程度確認されている。古い家名がやはりザクセン朝の時代にも顔を出しているからである。これはマジヤール統治下でも、カロリング期の遺産が、かなり継承された事実の裏付けとなる。ことに教会関係者は空白期の混乱を大いに利用、文字をあやつれる唯一の階層として、所有関係のはっきりしない地所を、偽造文書でちゃっかり懐にとりこんでしまったたかさを見せる。この種の文書はおびただしい数にのぼるといふ。



ハイブリヒ一世伯及び聖コーロマン殉難の図

オットーマルクの統治は、とりもなおさず帝国領拡大の事業だった。帝国東南部の国境線など無きに等しい。レオポルト一世につづくバーベンベルク家三代の当主は、ハイブリヒ強豪伯、アーダルベルト勝利伯、エルンスト勇敢伯で、かれらの添え名は戦さに明けくれた荒々



しい時代を物語ってくれる。スラブ族とマジャール族の勢力圏に接する帝国辺土をまかされた一門の苦勞は、並大抵のものではなかった。しかし、その分だけ見返りも大きかったといえようか。夷狄をけちらして獲得された領土は王領地に編入されたが、じきに功臣や聖職者に特権付きで下賜される。ドイツ国内での封建的所有関係の移動は、多分に名目的な色合も強く、古くから根をはる土着貴族の権利は、実質的には手つかずの状態だった。トップレベルの交替はあったにせよ、相手の所領を没収し、実入りのよい自家領にとりこむような作業には、大きな抵抗がつきまとう。逆臣の土地ですら、なかなか思うにまかせない。親戚縁者、一族郎党が控えていたからである。だが蛮族を討伐して得た土地は、それこそ処女地同様、所有関係のわずらわしさはない。払い下げの形式は、期限をきっての貸与から完全な贈与に至るまで多種多様、それに開墾・耕作・狩猟・漁業・入会権などの諸権利が複雑に交差する。教会や有力貴族は競って王領

地払い下げを願いで、王権もこれに気前よく答えた。

「神聖にして不可分なる三身一体の御名において。神の慈悲により王位につきし国王ハインリヒ。余はここに、余が忠実なるすべての者らに対し、今ありし者はもとより、後の世の者にも知らしめん。余は、これまで王領地として余に帰属せしデュレン・リーズィングとトリースティング川の間なる土地、並びにカンプとマルヒ川とに挟まれし二十フーフエを辺境伯ハインリヒなる者に下賜す。この者この地をば自由に用い、かつ法が認めるもろもろの権利を有すものなり。男女の農奴、教会、水車、魚住みし川、草原、森、放牧地、並びにこれと隣接せし草地、湖沼、小川、道路、道なき地面、租税、開墾地、未開墾地、建物など、ことごとくその利益に供すべし。余が云わんと欲するは、ハインリヒなる者、これらが財産を所有し、相続、交換、売却し、神に奉納するも自在との意なり。この王命による贈与がとこしえに有効ならんがため、余はここに文書をもってし、玉璽を押さん」

これはバーベンベルク家二代目当主ハインリヒ強豪伯が、ときのドイツ国王ハインリヒ二世から賜った安堵状で、一〇〇二年の日付けがある。一フーフエとは一家族が生活できる規模の土地面積。地味の良し悪しで広さも

ちがったが、現在の十ヘクタール程度だったとされ、しかも王の用いる尺度は豪気なところを見せ、一般の倍だった。とするとかなり広大な王領地が、農奴や附属施設つきで、バーベンベルク家の懐に転がりこんだ勘定になる。ただこの所領、ひとつはヴィーナー・ヴァルトの東部地帯、もうひとつはドナウからひどく北にはいったボヘミアとハンガリーの国境地帯。バーベンベルク家が新たな任務をおびる以前、すでにヴィーナー・ヴァルトの西側までのドナウ流域は開墾され、入りこむ余地がなかった事情が浮びあがる。それゆえかれらの家領獲得はヴィーナー・ヴァルトの東側地帯・マルヒフェルト、ドナウ左岸からボヘミア方面に広がるヴァインフィアテルやヴァルトフィアテルへの進出にかかっていたのだった。

バーベンベルク家に下された如くの安堵状は、歴代の国王によって教会や修道院のみならず、有力貴族らの一門にも沢山ばらまかれていた。フォルムバハ、エーベルスベルク、ラーテルンベルクといったバイエルン系やフ

ランケン系の有力土豪が、互に姻戚関係を結びながら各地に勢力をはり、豊かな所領を誇ったばかりか、教会は莊園経営のため、かれら眷族に警察・裁判権や租税徴集請負人の資格を与えるのが通例だったから、その役得は相当なものだった。

寺社領の守護職をフォークタイという。もともとこれは教会を護持し寺社領内の治安を維持するための職分だった。治安と裁判は国王官吏としての伯が行使してきたが、役人も踏みこめない「不入権」をもつ教会や修道院領が出現するに及び、こうした制度の成立をみたわけである。寺社側は各地の有力者にこの職を委ねるのが通例で、たいてい連中は伯の身分だったから、寺社領の「不入権」によっても、かれらの権限の縮少はなかったと見てよい。当然のことながらこのフォークタイ、単に治安維持の分限や徴税請負人の役にとどまるはずもなく、かれらは莊園住民の収奪にはげみ、ひどい場合には封主の方がその横暴さに悲鳴をあげている。ザルツブルク、パ

ツサオ、フライズィング、レーゲンスブルクなどの司教領のフォークタイは、一門の声望をにない、巨大な利権と結びついていた。有力家門は代々これを世襲し、新参者バーベンベルク家などなかなかこの恩恵に浴せない。

エルンスト勇敢伯のとき、それらしき形跡が認められるようだが、それとてもバイエルンにある教会のフォークタイで、パッサオ司教領のそれが、バーベンベルク家に委譲されたのはやっとレオポルト聖伯の時代だった。

当初バーベンベルク一門の所領は、他家にくらべればたいそう貧弱なものだった。ハインリヒ二世による贈与も、敵地のただなかにある原野といった代物に近く、それこそ命をはっての経営が求められた。しかしかれら一門の者たちは着実に勢力を扶植し、実力を貯えてゆく。こうしたとき帝国官吏としての辺境伯に附与されていた軍事統括権がなによりものをいっただろう。この辺境伯の職権、司教領や伯領にどの程度及ぶものだったかは、いまひとつはつきりとしなない。辺境伯領をくまなく覆いつ

くすような統制権は、まずなかったとするのが一般的である。とはいえ、古文書のおちこちには軍馬の飼料徴発、あるいは城砦の建設や補強のための夫役強制権とおぼしき文言もみえ、こうした権限はいかようにも運用・拡大できる性質のものだから、野心と精力にみちあふれた一門が、存分にこれを利用したことは疑いない。それに、いつなんどき蛮族の襲来をみるやもしれぬ辺土の厳しい情況が、なによりもバーベンベルク家に有利に働いたろう。財力や門地ではるかに辺境伯にまさる豪族といえども、夷狄にかかつては、一族郎党の戦力など少しも頼みにならぬことはよく承知していた。時には命を落とすこともあったが、たいてい再度の臣従で、事の決着ははかられた帝国中央部の内輪もめと違い、僻遠の地の内紛は、それこそ元も子もなくす危険に通じる。したがってバーベンベルク家のまわりに諸勢力が結集してゆくのもごく自然のなりゆきだった。この十一世紀、ドイツの興心はハンガリーやボヘミア方面にむけられ、帝国の威信

もまた東部国境地帯の制覇にかかっていたのである。

＊ ＊ ＊

アウグスブルクの近郊で、マジヤールの遠征軍が大敗を喫したころ、この遊牧の民は、初代ハンガリー国王・聖イシュトバーンの祖父にあたる人物の統率下にあつた。その昔、マジヤール族は七つの支族にわかれていたが、他民族との抗争のなかで、種族の力を結集して事にあたる必要に迫られた。このときかれらは互に腕を切りさき、したたる血潮をひとつの容器にうけたのち、それを啜りあいながら、アルパード家の男子を、代々自分たちの首長にあおぐ「血の盟約」をかわしたと伝えられる。略奪行でヨーロッパをふるえあがらせた遊牧民も、ドイツ国王の底力を思い知らされ、聖王の父ゲーザの代に一大転機を迎えた。アルパード家のゲーザは、配下の遊牧民を定住の生活に導くとともに、キリスト教をとりいれようとの姿勢を示す。かれは息子イシュトバーンに

洗礼を受けさせ、ドイツ皇室から息子の妃を迎えたのだ。父のあとを継いだイシュトバーンは、精力的に中央集権化を押しすすめ、折しも紀元一千年の MARIA 昇天祭の日、ハンガリー王国をうちたてる。かれの頭上には十字架をいただく王冠が燦然と輝いていたが、これはローマ教皇から届けられた品。初代ハンガリー国王が、王国創業の認可を皇帝ではなく、教皇の権威にもとめた事實は、以後のハンガリー史のなかで重大な意味をもって立ちあらわれる。そもそもハンガリーは建国の当初からドイツ帝冠下にはない、聖イシュトバーンの戴冠は神の代理人たる教皇の手で成就したとの自負だった。この精神がマジヤール主義の原点を形づくり、神聖ローマ帝国あるいはハプスブルク家とのかかわりのなかで、常にハンガリー民族主義の理念的支柱として機能しつづけることとなる。

マジヤール族のキリスト教化は、聖王の治世下で大いに進み、各地には司教座が配され、グランには早くも大

司教座が現れる。西方からはいりこんだ布教者らがこの作業に従事したが、そのなかでパッサオ司教ピルグリムは、聖王の洗礼式を挙行した人物として名高い。『ニーベルンゲンの歌』にも、同名のパッサオ司教が登場する。かれはブルグンドの姫君の叔父とされ、姪御の輿入れ行列をパッサオの町で迎え、エンス川の国ざかいまで彼女を見送るのだ。長編叙事詩の作者は司教ピルグリムの大いなる功績をたたえるため、作品中にかれを配したとすることで、専門家の意見は一致している。このことから、不詳の詩人はオーストリアはドナウ河畔の人、それもパッサオ司教座と深いかわりをもつ人物だったのではないかとの絞るムキもある。

ヨーロッパの主要都市は無論のこと、新興のハンガリー王国の田舎町ですら、はやばやと司教座をもつ榮譽に浴したのにバーベルク家やハプスブルク家の王城の地・ヴィーンには、なんと十五世紀中葉に至るまで司教猊下の有難いお姿が欠けてしまう。司教座の有るなしは

町の格式とも深くかわる。町当局も統治者も決して手をこまねいていたわけではない。努力はした。しかし司教座招来の作業は遅々として進まない。そしてこの異常事態には、ザルツブルク大司教とパッサオ司教の勢力争いがからんでいたのだった。

ザルツブルクはカール大帝によって、大司教座の地位を与えられ、当然パッサオ司教のうえに立つものとされた。しかしパッサオの方は、幾度か大司教の統制をかわそうとの動きを示す。ハンガリー教化の功労者ピルグリムが、司教職にあったときもそうである。蛮族改宗を成功させるだけであって、この司教目的の為には手段を選ばず、世に「ロルヒ文書」として名高い、偽造品すら作成した。後年ハプスブルク家のルドルフ建設公が、一門の格式を選帝侯並みにしようとして「小勅許状」を思わせて、この文書、皇帝や教皇の勅書らしき物件をもちだしながら、パッサオ司教座の来歴を大いに誇示する。カール大帝の御世につくられたザルツブルクなど物

の数でない、当方はローマの時代、聖セヴェリオンがおわしたエンス川は、ラウリアクムの町のロルヒ司教座に由来する。この由緒正しき司教座が蛮族の難を避け、パッサオの地に移ったのだというわけだ。時の皇帝ハインリヒ二世は大いに心を動かされたようだが、ザルツブルク大司教もさるもの、負けじと偽造文書作成で応じ、ピルグリムもついに計画を断念、ハンガリー方面にありあまる精力を傾けたのだった。

こうしたザルツブルクとパッサオの争いは、ヴィーンの司教座問題にも影を落とす、教区内に司教座をもてば格上げまちがいなしと踏んだパッサオが、地元オーストリアと組んで教皇に働きかければ、ザルツブルクは遠路ローマまで足を運び計画をつぶす。ザルツブルクが主導権を握り、ヴィーンに司教座をおこうとすると、今度はパッサオ司教が黙っていない。互に足を引っぱりあっただけではなく、王家が独自で設立の動きをみせるや、両者協力して阻止にかかるといった具合。かくしてハプス

ブルク家のルドルフ建設公は道なかばにして崩御し、その実現には、同家出身の皇帝フリードリヒ三世の御世を待たねばならなかったのである。

ハンガリーでは長いこと、首長はアルパード家の男子に限るとする部族時代からの「血の盟約」が生きつづけた。ところが、いや正確に云うなら、それゆえに、玉座をめぐる争いが絶えない。王位継承問題に端を発する内紛はアルパード家の宿痾ともいえ、この王朝の消滅のときまで、三百年の長きにわたり悪しき輪廻がくり返される。ひどい時には、四十年間に七人もの王と、その僭称者の交替劇が演じられる始末であった。兄弟相続の根強い慣習が元兇である。遊牧と略奪をなりわいとしていた民には、常に的確な判断を下せる統率者が不可欠であり、首長の子供の成長を待っているなどのゆとりはない。定住も知らず外敵との抗争にあけくれた部族時代、統率権が直ちに部族長の兄弟や叔父といった実力者に移行したのも、種族の知恵と評価できよう。ところが定住

と王宮生活がはじまっても、はるか漂泊の時代からの慣習が足枷となり、なかなか長子相続制が確立できない。新しい統治者の出現と時を同じくして、親族への肅清が荒れ狂い、おびただしい数の犠牲者が出ることとなる。逃げ遅れた者らには死か、あるいは眼をつぶされ、牢獄のなかで呻吟する運命が待ちかまえている。将来の禍根を断とうとする権力者の焦りだった。

相手の眼をつぶし、闇の世界に閉じこめようという処置は、当時の考え方によれば、それでも罪一等を減じた寛刑にあたったらしい。アルパード王朝史には、ベーラ二世盲目王という特異な人物が出現している。かれは一門の内紛劇で目をくりぬかれたあと、王座にまつりあげられた数奇な経歴をもつ。国王の弟であったベーラの父親は、我が子の王位安泰を願う兄王に殺され、ベーラの方は眼をえぐられた。父親のお膳立ですんなりと王座につけたイシュトバーン二世だったが、病弱のゆえにか世継ぎに恵まれない。周囲を見渡しても、父親が我が子可

愛さの余りに為した手荒な処置が裏目に出てしまい、アルパード家の血脈をひく者は、どこにも見当たらないのだ。王はハンガリー王家が消滅の淵に立っているのに気づき、愕然とする。ところが死んだと見られていた従兄弟が、僧院にひそんでいるとの情報もたらされる。狂喜したイシュトバーンは、貴重なアルパードの血が流れるベーラを宮殿によびよせ、自分の後継者としたのだ。これは親族の肅清がうまくゆきすぎた場合の悲劇だったが、たいてい事はこのように首尾良く運んでくれない。暗殺者の魔手をのがれ、亡命に成功する者たちも多く、遺恨に燃えるかれらはやがて外国勢と組み、祖国の反体制派をあおりたて、ついには帰還してくるわけだ。

四〇年に及ぶ統治で、ハンガリー王国を完成したかに見える聖イシュトバーンだったが、はやくも晩年にはその偉業に大きなかげりが現われてしまう。後継者にと考えていたひとり息子が、猪狩で命を落とし、聖王は致し方なく叔父の子を指名したが、反国王派は聖王の妹とヴ

エネチア総督の子で、国王親衛隊の指揮官ペーターをか  
つぎだしてくる。ペーターは相手が王宮に召しだされる  
前に刺客をはなち、眼をつぶし、耳には鉛を流しこむ  
といった狂行に及ぶ。すでに老衰はなはだしかった聖王  
は、一味の暴挙にも為す術がない。このときもアルパー  
ド家につながる者が多数、肅清の犠牲となった。しかし  
聖王の甥の子供、アンドレーアス、ペーラ、レベンテの  
三兄弟は、からも国外脱出に成功したのである。

狂暴で、しかもドイツやイタリア系の側近を重用する  
新国王に、ハンガリー貴族は亡き王のもうひとりの妹の  
夫・オボを押し立てて決起した。ここには聖王のあまり  
に急ぎすぎた国内改革への不満がからんでいたらしい。  
形勢不利とみるや新国王ペーターはオーストリアを経て  
ドイツ皇帝ハインリヒ三世のもとに身をよせた。かくし  
てドイツとハンガリーは交戦状態にはいり、オボの方は  
先手をうつかたちで、兵をドナウ兩岸に沿い上流へと散  
開させ、辺境伯の不意をつく。「繁みに身を隠しながら

狼の如くに」忍びより、トライゼン川のほとりで大部隊  
にふくれあがったハンガリー勢に、住民は寝込みを襲わ  
れた。敵の急襲を知ったアーダルベルト勝利伯とその息  
子レオポルトはすぐさま反撃に転じた。史書は住民をひ  
きずり、略奪品を運ぶ敵勢を迫撃し、これを敗走させた  
辺境伯父子の健闘を記す。

ザリエル朝のハインリヒ三世は、聖王なきあとのハン  
ガリーの混乱に、三度もの遠征を試み、一応の戦果をあ  
げている。一〇四二年から三年かけて、亡命王ペーター  
を擁した皇帝は、ハインブルクとプレスブルクの町を  
おとし、グランまでも進出、ライタ川までの地を帝国領  
に付け加えた。同志の裏切りにあい、命を落とした僭称  
王オボにかわり、ペーターは皇帝の後押しで王座に返り  
咲く。このときかれはドイツ皇帝に臣従を誓い、「黄金の  
槍」をそのあかしとして差し出し、ハインリヒはさっそ  
くこの槍をローマ教皇に送り届けるといった一幕があっ  
た。教皇庁とドイツ帝室とが教会改革で手を携え、双方



が分限をわきまえていたハインリヒ三世の時代だったから、皇帝の方もそれほど他意もなく、戦利品の一部を贈呈したまでのこと、他方受けとる方にしても、相手のあつばれな心ばえを賞讃しこそすれ、このちハンガリー王国の宗主権問題が、この槍一本をめぐる展開されようなど思いもよらなかったに相違ない。だが考えようによっては、ハンガリーは教皇の祝福と加護のもとに創設をみた王国、ボヘミヤのようにドイツの皇帝が勝手に属国化できる筋合いのものではないとも云える。やがて始まる叙任権闘争の時期、かの怒れる教皇グレゴリウス七世は、居丈高にハンガリーの宗主権は自分にありと叫び、貢納金を要求したが、その論拠として「黄金の槍」の一件をふりかざす。ドイツ皇帝はその昔、ハンガリー王国の主権の象徴をちゃんと教皇庁に奉呈しているではないかと云うのであった。

ふたたび王冠をかぶったのもつかの間、まだ玉座の敷物もあたたまらぬうちに、人望にかけるペーターの政権

は、崩壊してしまふ。国外逃亡に成功し、ポーランド王の庇護を受けていた三兄弟が、ポーランド勢をひきいて、ハンガリーになだれこんだのだった。このたびはペーターが眼をえぐられ、苦悶のうちにはたと伝えられる。宿敵を討ちとった兄弟の間にも、やがてアルパード家のお家芸とも云うべき、追放と粛清の内紛劇がくり返される。兄王は我が子を継承者に望み、弟公は激しくこれに抵抗するのだ。

＊ ＊ ＊

教皇と皇帝が覇を競いあった、いわゆる叙任権闘争の混乱は辺境の地にも及ぶ。両巨頭はこの世の至上権というひくにひかれぬ理念をめぐる、激しくわたりあったが、世俗諸侯の方は、多かれ少なかれ両者の角逐を、理念と信仰の問題としてではなく、まずは自家勢力拡大の好機と理解していた。反皇帝派の面々にとっては、教皇の旗じるしは願ってもない聖戦のお墨付きだった。教皇

は敵に破門を下すと同時に、主従の誓約破棄をも神の嘉し給うところとしてくれたから、あるじに齒むかおうとも逆臣の汚名を着せられずにすむ。かれらとても武人としての名誉を重んずる気骨は持ちあわせていた。したがって、誓約解除の持つ意味は当時たいそう大きかったのである。

グレゴリウス七世と全面衝突した神聖ローマ皇帝ハインリヒ四世の治世はバーベンブルク家の当主にあてはめれば、エルンスト勇敢伯、レオポルト美伯、そして聖伯レオポルト三世と三代にもわたっている。ザクセン、ザリエル二朝を通じ、歴代皇帝に臣従しつづけた親皇派の伝統は一時的に揺らぐ。オーストリアも他のドイツ諸邦の例にもれず、叙任権闘争を契機に、領邦体制への道を強く踏みだすが、それと同時にこの時節、教会刷新の激しい動きもまた辺境伯領に押しよせて来たのだった。

十一世紀、教会改革の新しい波が、ついに大きくうねり始める。オットー大帝以来、帝国統治の要として各地

に配された司教や修道院長は、広大な所領とおびただしい特権を附与され、世俗諸侯となんらかわるところのない機能を果たしてきた。しかし俗権を行使し、権力闘争に狂奔する宗教界のあり方に対し、魂の救済者としての本領にたちかえるべきだとの内部反省が奔出したのである。聖ベネディクトゥスがその昔かかげた「服従」「童貞」「清貧」の徳を実践してきたクリュニー修道院がこうした運動の中心的役割をになう。フランスはクリュニーの片田舎にあって、俗権の干渉も少なく、修道士としての徳行をつんでいた集団には、いわば天上からの声に耳をかたむける余裕があったといえようか。かれらは教皇を直接の領袖にあおぎ、俗世の汚れに染まりきった教会組織の立て直しをはかろうとする。まずは同じ修道院のなかに共鳴者をみだし、やがて一大勢力を誇るまでに組織は拡大していったのである。

改革派がかかげたのは、「聖職売買」と「聖職者の結婚」問題である。ローマの古い昔から教会や修道院は、

有力貴族の手で建立され、それらは当然設立者の私有財産とみなされてきた。莫大な財を投じ、広大な領地を寄進し、僧侶を召しかかえての事業だから、施主一門の貴重な財産だったこともうなづけよう。したがって教会や修道院が他の物品同様、売買の対象ともなり、さまざまの特権つきで他人の手にわたったり、はたまた娘の嫁入り道具の一部につけくわえられたりもする。しかしこれらは設立者のもつ権利の正当な行使だと考えられた。

こうした伝統的な解釈によれば、国王が設けた司教座や教会がかれ個人のものであり、聖職者の任命権もかれに帰するとされたところではなら不思議はない。また国王や皇帝から錫杖をたまわった司教たちにとり、主君への奉仕と忠誠は自明のこと、我が身が世俗君主の家人の位置に零落しているなどの意識はなかっただろう。かれらは率先して宮廷に伺候し、行在所を提供、はては鎧冑に身をかため、合戦におもむく。皇族の一員や宮廷教会出の人材が、各地の主要な教会に配されたドイツでは他国

にくらべ聖職が金権におかされる事態は少なかったようだが、とりわけひどかったのはイタリアで、巨大な利権と結びついた高級聖職者の座をめぐることは、金品の授受が慣例と化していた。

教皇の選出とて例外ではない。ハインリヒ四世の父、ハインリヒ三世が半島に乗りこみ、三名の教皇を廃し、新しい人物をたてたときも聖庁は紊乱をきわめていた。ローマの門閥らの権力争いに、ふたりの教皇が誕生し収拾がつかない。結局ふたりの猊下には存分の金子を与えてお引きとりを願い、改めて別の人物にお出ましを願う醜態ぶりだ、ハインリヒ七世にクレームをつけられても致し方ない状況だったのである。こともあろうに改革派のグレゴリウス七世の登極ですら、金でペテロの座を買った男との非難がつきまとう。教皇グレゴリウス誕生には、実に古式ゆたかな演出が試みられた。前任者の葬儀の最中に、さる枢機卿の音頭とりで「聖ペテロは教皇グレゴリウスを選び給うた」と歓声をあげる者たちにかつ

がれながら、かれは玉座まで運ばれたのだ。教皇の選出は古来より「聖職者と民衆」の手でなされるとされてきたからである。自分としては全くその気はなかったと新教皇は述べたが、かれの言葉をまともに受けとる者はいなかったという。後世の史家も、民衆買収のためには十分な裏工作がなされていたと見ている。ともかくこのように、教皇や司教らの周囲には、「聖職売買」の噂が絶えなかったものの、まだまだ事が金にかかわっているうちはよかったともいえよう。実はこの「聖職売買」なる理念、そのなかに俗人による聖職者叙任を否定する強力な爆薬をも秘めていたのである。クリュニーの運動やハインリヒ三世の時期には、これが突出するに至らなかったが、教皇グレゴリウス七世が出現するに及び、問題はこの地上の支配権をめぐるの、皇帝権と教皇権の激突というかたちをとってしまう。

改革派が唱えたもうひとつの主張、「聖職者の結婚禁止」に関しては、トップレベルでの合意は簡単だった

う。そもそも統治者が聖職者を重用したのも、もとはとえば、かれらは子供を持つはずのない階級だったからである。あの世の事は無論、法や有職の俗事にも通じた坊主連中は、統治者にとって、封土にまつわる厄介な世襲問題をも回避してくれる重宝な存在だった。

教皇の側にしても、結婚の禁止は配下の教会組織の統制には好都合といえた。しかしこの禁令、当事者にとっては深刻な問題で、妻帯し子供まである聖職者も多く、高位の者たちは妾を囲って外面をとりつくような例はざらだった。

教会刷新運動の影響が次第に教皇庁にも浸透し、聖座のまわりには改革派が集まりだす。一〇五九年の宗教会議では、一般の聖職者に対しても、使徒的な生活を旨とすべしとの勧告がだされた。教区民の司牧をつかさどる世俗聖職者にも、修道院流の戒律をとりこんだ生活が唱導される。こうした趣旨で設立されたのが、教区の聖堂に所属しながらも、修道院と同様、共同生活を営み、し

かも良き司牧としての職務をはたそうとする修道参事会である。かれらの会則は聖アウグスティヌスの教えに基づいていたから、アウグスティヌス参事会とも呼ばれたが、これは既存の教会制度を生かしつつ、修道院流の長所を導入しようとした試みだった。

ハインリヒ三世は、教会刷新の動きに大きな理解を示す。この皇帝、若いときから「坊主」とからかわれるほど信仰に篤く、しかも政治手腕は抜群で、帝国内部を安定させたばかりか、ハンガリー、ボヘミアにも威令を及ぼすという強力な君主だった。幸いにも改革派は、まだ後年の急進主義をかかげるに至っておらず、皇帝が教皇選挙に強権の発動で応じたときですら、干渉とは受けとらない。もっとも皇帝の方は慎重に事を運び、従来の慣行の枠内におさまるような手順を踏んでいる。かれはピピンやカール大帝、あるいはローマ市の有力門閥らの例にならない、まず自分を「ローマ守護職」に任じさせ、しかる後に教皇選挙を主導し、意中の人材を選ばせたい。

最後は「聖職者と民衆」の歓呼のなかで事をしめくくられたのだった。

改革運動は皇帝の支援をうけながら、徐々に進行してゆく。聖ペテロの座には改革派の教皇がすわり、公会議が幾度も召集され、教会刷新の回勅が発せられた。だがこれらは決して徹底したものではなかった。なるほど「聖職売買」で告発され、有罪とされた司教も幾人かは現われたが、規定の贖罪期間をすぎれば留任が認められたし、「結婚の禁止」令の運用も、ドイツなどでは、妻帯者を町の外に住まわせるとかいった程度のことですべて終わってしまう。ドイツの司教は相かわらず皇帝が叙任し、聖座にはつづけざまに、三名ものハインリヒ三世の息のかかる人物がすわりこむ。

しかしハインリヒ三世の崩御ののち、聖座は次第に帝室から離れはじめた。ハインリヒ三世が身罷ったとき、後継者はまだ六歳の幼少だった。皇太后が摂政役をつとめたものの、この女性、政治的センスは零で、側近の司

教らに操られ、王領地を失い、各地に有力諸侯を輩出させてしまう。無論、遠隔地ローマの操縦など無理な話だった。聖庁との結びつきは希薄になり、とみに力をつけだしていた改革派はドイツ帝権の弱体化を機に、ついに急進主義に転じる。「聖職売買」の問題が俄然クローズアップされ、これまでの穩健派の雜魚狩りとはちがひ、急進派は巨大な疑惑の中心にむかつて的を絞る決意を固める。金で信仰を買い求めようとしたシモンなる男にちなみ、「シモニスト」と称される墮落僧の跋扈こそ、俗権の手に聖職者の任免権が握られているからではないか。事が事だけに誰しもモゴモゴと口ごもるだけで、避けて通つてきた聖域に、かれらは踏みこむ。枢機卿のひとり「シモニスト」に対する三つの書』を著し、「聖職売買」は邪教の行為、しかも教会の墮落は俗権の干渉によるものときめつけた。かれは『イシドール偽書』に典拠しながら、その昔司教叙任権は聖座に帰属したと教皇至上主義を説き、公然と帝権に対し宣戦を布告。ついに国王の

聖職叙任権こそ、諸悪の根源とされてしまったのである。

ハインリヒ四世は、十六歳位からなんとか帝国の舵にぎりはじめたようだ。母親の摂政時代に散佚した家領の獲得をあせるあまりに、この未熟な青年国王は、反勢力の結集をうながし、国内の反乱平定に忙殺される。それでも一〇七五年にはザクセンを屈服させ、ようやく確かな地歩を踏みだしたかに見えた。ハインリヒの対ザクセン戦はチューリンゲンのヴンストゥルト河畔で闘われたが、この合戦で、国王のもとに駆け参じていたバーベンベルク家三代目当主・エルンスト勇敢伯は、深手を負い、翌日死去した。左面顔に戦斧、頭頂部に劍の一撃をうけ、左大腿部もくだかれるという壮絶な討ち死にだったとされている。

ハインリヒが国内に一応の秩序を回復できたころ、ローマの地には宿命のライバル、グレゴリウス七世が出現していた。このときまで、副助祭ヒルデブランドとして



エルンスト一世伯討ち死にの図

数代の教皇につかえ、改革運動の糸を舞台裏でひいてきた影の実力者が、ついに出番を迎えたのである。グレゴリウスはまさしく燃えるような信仰と嚴の如き信念とにつらぬかれた怪僧だった。かれの体内には「天上の扉をすらあけうる者、あにこの地上をすべきことあたわず

や」との恐るべき自信がふつふつと沸きたぎっている。

この男にかかれれば、皇帝といえどもひとりの俗人にすぎない。精神界の指導者がこの世の最高権力を担うのは絶対の真理だった。かれは魂と肉体の従属関係をモデルに、教皇至上主義をかかげ、世俗の権力者たちすべてを自分の足もとにひれふさせようとする。己れの義するところに殉じ、現実感覚の欠如が、その最大の強みでもあった五十がらみの小男。受難者の如き孤高の姿は多くの者をひきつけた反面、独裁的でアクの強い強力な個性は多くの敵をもつくりあげる。熱烈な信奉者には女性の姿がめだつ。当のドイツ国王ハインリヒの生母や、トスカナ女伯とその娘マチルデなど、敵に女人顧問団と誹謗される一群がかれにつき従う。その逆鱗に触れば、朋友ですら即座に見限られ、グレゴリウス登極の手筈万端を指揮した腹心の枢機卿も反対派陣営に身を投じ、グレゴリウスを「聖なるサタン」と呼ぶほどだった。

こうした人物と対決せざるを得なかったハインリヒ四

世は、めぐり合わせが悪かったとしか云いようがない。それにしてもハインリヒの最初の出方は軽率だった。事の起りはミラノの騒擾による。ロンバルディア地方にあるこの町は、元来皇帝派の勢力が強かったが、教会純化のうごきのなかで皇帝任命の司教が「聖職売買」で改革派の市民に追放され、この「屑拾い」と称されるグループが市政を牛耳ってきた。ところが聖堂が焼けおち市街の半分が被害をうけた大火をめぐり、これをパタリアの仕業とする保守派の扇動に一般市民が呼応し、町はパタリア狩りで騒乱状態になってしまふ。市の実権を握った保守派貴族は、国王ハインリヒのもとに使節団を送り、秩序回復と保護を願ひでる。ザクセン問題の処理で自信をつけていた国王は、教皇の警告も無視し、さっそく配下の司教を送りこむ。改革派パタリアの潰滅で痛手をうけていたグレゴリウスは、ドイツ国王の出方に激怒し、ハインリヒの側近たる司教に、聖務停止の処置を下す。まだ国王その人にむけては直接の非難はさし控えていた

が、若き国王の方はつい軽率に反応してしまふ。

一〇七六年、ハインリヒはヴォルムスに主だったドイツの聖俗諸侯を集め、教皇グレゴリウス七世の廢位宣言を發した。挑戦状は「僧ヒルデブランドよ、座をおりるべし、汝永劫に呪れし男よ」とヒステリックに叫びたてていた。教皇はここで伝家の宝刀をぬき、国王ハインリヒの破門に踏みきる。グレゴリウスの方はこの日に備え、以前からノルマン貴族の懐柔につとめてきた。パレスチナ巡礼の道すがら、たまたまイタリアに上陸したノルマン騎士団は、当初庸兵として重宝がられた存在にすぎなかったが、やがて新天地の噂をききつけた後続組が、ノルマンディー海岸からアルプスを越えてぞくぞくといりこみ、ついには南イタリアを占領し、シチリア島をも窺う一大勢力と化してしまふ。教皇庁はこの新興勢力を手なずけようと、南イタリア領有安堵の方針で臨む。ノルマン貴族にしても、ようやく半島の一角に足がかりをつくった段階だったから、聖座の宗主権下であろうと、



カラブリアとアプリア地方の認知は有難い。もちろん聖庁には、かれらが早晚やっかいな勢力になるだろうとの読みがなかったわけではない。だが当面の敵はドイツの帝権、まずは教皇領の後背地を確保しなければならぬ状況だった。

さらにグレゴリウスはかの女人顧問団のメンバー、トスカナ女伯とその娘に強力な支援を期待できた。アペニン山脈の北端部からマントヴァ、フェラーラ、ルッカの地をおおいつくす女伯領、文字どおりドイツに立ちほだかるかたちで教皇領を守護している。ベアトリクス女伯は、トスカナ伯の奥方だったが、伯の死後、娘マチルデをつれロートリンゲンの髭公と再婚。公はハインリヒ三世の競争相手で、帝なきあとの皇太后の親政期、教皇派の大物として、イタリア・ドイツを股にかけて活躍した人物である。公はイタリアの地にも勢力を扶植しようと、息子に妻の連れ子を娶せる。だがこの母と娘、たいへんな女傑で、自分らの所領は亭主にさえ自由にさせな

い。しかも女性特有の一途さでグレゴリウスに肩いれし、かれを神とも崇め、父とも慕う。髭公の死後、息子はこの母と子に嫌気がさし、ロートリンゲンに帰ってしまつたから、ハインリヒとグレゴリウスの衝突の時期、ふたりの女人は常に教皇のそばにある。叙任権闘争の第一グラウンドにおけるクライマックス、きらびやかな行列をおしたててイタリアに向つたハインリヒが、一転して素衣をまとい、はだしで一月の厳寒のなか、グレゴリウスに赦免を願つた「カノッサの屈辱」の舞台は、この女伯の居城の門前だった。

教皇はすでにドイツ国内の分裂を策し、確かな手ごたえを得ていた。ハインリヒは事の成りゆきに仰天する。予告されたように教皇がドイツに乗りこんで事の結着をはかるようなことになれば、国王の座を失う危険は大いにありえた。

カノッサの城門で赦免を請う国王を、グレゴリウスは初めがんとしして受けつけない。しかし、トスカナ女伯な

ど側近の懇願にまけ、ついにかれはハインリヒを腕に抱きかかえてしまう。これがいけなかった。カノッサ城での晩餐の席上、屈辱の余り食事ものを通らず、爪でテーブルをひっかいていたというハインリヒだったが、ドイツに帰るやまたまた勢力をとりもどし、留居中に対立国王に押されたシュヴァーベン公ルドルフを圧倒する。

「カノッサの屈辱」から三年目の一〇八〇年、再度の破門をうけたハインリヒは、対立教皇にラヴェンナ司教をたて、イタリアに進軍。ツキはハインリヒの方にまわってきていた。対立国王ルドルフは戦死し、それも誓約のとき使われる右腕を切りおとされての死だったから、皇帝派は神罰が下ったのだといさみたつ。イタリアでは、トスカナ女伯マチルデが、ラヴェンナ司教領を攻めてはみたものの、反対に大敗を喫してしまっていた。グレゴリウス追落しと皇帝戴冠の機が熟したかにみえた。国王は娘アグネスの婿、若きシュヴァーベン公、フリードリヒ・フォン・シュタウフェンを先発隊として半島に

送りこみ、北イタリアの皇帝派を糾合。出だしはすこぶる快調だったが、いよいよ本命のローマ攻略にとりかかるや町は執拗に抵抗し、一向に戦果があがらない。かたや攻囲された町には巡礼者もよりつかず、町と聖座の収入はガタ減りだった。トスカナ女伯は、健気にも装身具まで売りはらって応援したものの、妥協を知らずかたくなに己れの道を驀進するばかりの教皇に、一部枢機卿と町の有力者が寝返りとうとう市門を開け放つ。だがローマ開城とはいっても、「聖なるサタン」、グレゴリウスは聖天使城にたてこもったままの異常な状態である。しかも攻防戦はこのときまで、実に三年近い歳月を飲みこんでいたのだった。聖天使城は難攻不落の要塞だったし、敵の救援部隊が近づきつつあるとの噂も広まっていたから、ハインリヒは戴冠式を急がせる。あわただしい作業だったが、それでもかれは手順と形式にひどくこわなかった。手を抜けば、この先どんなケチをつけられるか知れないというわけだ。まずはラヴェンナ司教が正式の教皇

になるべく、ラテラン宮殿の玉座にすわり、聖ペーター聖堂で塗油式を受ける。しかるのち、このほやほやの新米教皇がハインリヒの皇帝就任式を挙行したのである。

皇帝の主力部隊がひきあげるや、頃あいを見はからったように、これまで東ローマ帝国領のバルカン半島にいたノルマンのギスカール・ロベールがローマに駆けつけ、グレゴリウスを救出した。そこまでは良かったが、救援軍さっそく略奪部隊に変身、市民の憎悪は教皇に向けられてしまう。ローマを逃げ出したグレゴリウス七世は、サレルノの町でロベールの保護を受けながら、相変わらず敵を糾弾しつづける。しかし負け犬の遠吠えにも似て劣勢はおおうべくもなく、聖天使城脱出の日から数えて丁度一年目、この熱血の殉難者は、敵を呪いながらその生涯をとじたのだった。

ハインリヒ四世がローマ攻略で、悪戦苦闘していた一〇八一年の七月、バーベネルク家五代目・レオポルト二世美伯は反皇帝派の旗印をあげる。かれはトゥルンの

町に、辺境伯領の主だった者たちを集め、教皇支持を宣言、皇帝派追放に踏みきったのである。イタリアからなんとか皇帝位を得て凱旋したハインリヒ四世は、余勢をかって美伯の職を召し上げ、辺境伯領をボヘミヤ公に封土しようとした。

ドナウからボヘミヤの国境に至る地帯は、まだ辺境伯領とはみなされず王領地扱いだった。ここではドイツ系貴族たちがじかに皇帝の許しを得て、所領の拡大を競っていたが、なかにはクエリンガー一門のようにバーベネルク家の従臣でありながら、中央政府によってこの地を安堵され、辺境伯すらなかなかその特権に手をふれられない勢力も存在した。

ボヘミヤ公は皇帝のお墨付きをふりかざし、さっそくオーストリアの併合に乗りだす。この戦いに美伯の軍勢は破れた。しかし、この軍事上の敗北は、そのままボヘミヤの勝利には結びつかず、クエリンガー一門をはじめとするオーストリア勢の強い結束に、敵はドナウ北岸の

地を荒したただけで、引きあげざるを得ない。辺境伯のあなどり難い実力をみせつけられた皇帝と、帝権にたてつくことの不利益を痛感した美伯とは、その後しばらくして互に歩みよる。一方ボヘミヤ公ヴラティ斯拉フ二世は皇帝支援の恩賞として、ボヘミヤに対する帝国封土権は従来どうりだったものの、一代限りの王号使用を許され、先に下賜されたオーストリアを放棄したらしい。

美伯は一時期、ボヘミヤとの国境に近いガルスの中に、本拠を置いた形跡もある。ボヘミヤと辺境伯領との関わりは古く、下オーストリアの守護者として名高い、聖コーロマンの伝説もこれを裏づけている。アイルランドの領主コーロマンは、聖地巡礼の途中、ボヘミヤのスパイと間違えられ処刑されてしまう。しかしかれの死体はいつまでも美しく輝き、磔りつけ柱には青々と葉が茂るなど多くの奇跡が生じた。ハインリヒ強豪公はそれを知って、手厚くメルクの教会に葬ったのだという。

レオポルト二世・美伯が、一門の伝統ある親皇派路線

をすてた背景には、パッサオ司教アルトマンの影響があった。ハインリヒ四世が教皇廢位の宣言を下したとき、ザルツブルク大司教とパッサオ司教は参朝していない。宮廷教会出の大司教ゲプハルトはハインリヒ三世の覚えもめでたく、ザルツブルクを賜わった人物で、朋友アルトマンをパッサオ司教座に据えたのもかれである。何故ザリエル王朝と深いつながりをもっていた両名が、反皇帝派に転じ、グレゴリウス支持にまわったかはつまびらかではない。恐らく帝国諸侯としての義務をとるか、神の下僕としての道を歩むかの選択を突きつけられたとき、かれらは己れの信じるところに従い決断したものと思われる。したがって両名は、バイエルンやシュヴァーベン公など世俗諸侯が、風見鶏の如く態度をかえるのは違い、筋入りの硬骨ぶりを発揮。皇帝派が力を得るにしたがい、司教領は蚕食され、ゲプハルトはシュヴァーベンに、アルトマンはオーストリアに亡命を余儀なくされるが、それでも最期まで教皇支持の筋をまげなかった

のである。

教皇代理使節の肩書きをもつパッサオ司教アルトマンは、オーストリアの地に大きな足跡を残した。かれは教会の改革に精力的にとりくんだのである。そのころ司教座の系列下にある教会や修道院といえども、乱れかたは相当のものだったらしく、『聖アルトマン伝』には「誹謗・密告の輩、美食飽食に身をゆだね、良き仕事を厭う厚かましき者どもの」の巢窟と化していたとある。パッサオ司教座がオットー大帝の御世手中にしたザンクト・ペルテン、クレムスマンスタール、ザンクト・フローリアンの名刹にアルトマンは、新しい改革を導入した。ザンクト・フローリアンは修道院として出発していたが、その後在家の聖職者が送りこまれたようで、神の家とは名ばかり、僧たちは妻帯し狼籍は働くわで、聖職者とはとうてい云えない手合いだった。こうした連中を相手の改革だったから、使徒の道を説いての教化処置などでおさまるはずもなく、有無をいわず叩きだすといった荒療

治。追いだされた者らも黙ってひきさがらず、酒倉のブドウ酒をブチあげたり、武器をふりかざし、火を放つなどの狂行に及ぶ。こうした騒動の場合、辺境伯が乗りださなければ事態はおさまりがつかなかった。とりわけアルトマンは皇帝の勘気にふれた身だったから、辺境伯の応援が不可欠だったろう。アルトマンが司教座の財産を勝手に処分したとの記録や、後の辺境伯が寄進の名目で旧パッサオ領返還を承知しているケースもあり、この改革派の聖職者、かなりの額を辺境伯に貢いだようだ。ザンクト・ペルテンとザンクト・フローリアンはアウグスティヌス派の修道会で、クレムスマンスタールはクリュニー式の戒律で刷新がはかられた。さらにかれはダウンクルシュタイナー山中、ゴットヴァイク修道院の建設に情熱をかたむけ、ここを改革派の拠点にしようとした。アルトマンにより、オーストリアの宗教界は新しい息吹きをふきこまれやがて大いなる飛躍のときを迎えることとなる。

＊ ＊ ＊

ハインリヒ四世の治世は、うんざりする程長い。しかも政情はめまぐるしく変わり、振幅も大きい。強敵グレゴリウスが鬼籍にはいつてくれ、ほっと息をついたのも束の間、ふたたび強硬路線を継承するウルバン二世の登極をみてしまう。緊張は高まり、ハインリヒは対立教皇支援のため、またもイタリア遠征に乗りださねばならぬ。やり手の新教皇はロンバルディア諸都市を指嗾したばかりか、皇帝の長男でドイツ国王コンラートを抱きこみ、雄邦バイエルンの応援をもとりつける。コンラートにはロンバルディアの王冠をチラつかせ、バイエルン公の子息には、トスカナ女伯マチルデとの縁組をお繕立てするという辣腕ぶりだった。

イタリアに出兵したハインリヒは窮地にたたされる。バイエルンにアルプス越えの要所を押えられ、ヴェロナに閉じこめられた恰好となってしまうのだ。この間、

理想主義一辺倒のグレゴリウスとは違い、現実家肌のウルバンは、近隣諸国に着々と地盤を築き、一〇九五年にはクレルモンでヨーロッパに号令、十字軍の熱狂を呼び起こす。ヴェロナにいる皇帝の影は薄れ、ドイツ帝権は「死に体」に近い有様。ハインリヒは絶望のあまり、みずから命を断とうとさえしたという。

ところが教皇とバイエルンの協調にヒビがはいり、バイエルン公が皇帝に歩みよるといった事態が生じる。ウルバンのまとめた縁組の破綻が原因だった。そもそも初めから、この件に関する教皇のやり口は、女術にも等しいとの非難がつきまわっていた。皇帝派がバイエルンとローマの提携を歓迎しなかったせいもあるが、それだけではない。この縁組、花嫁は四四歳、花婿は一七歳で、いくら政略結婚のまかり通っていた御時勢とはいえ、とてもまともには受けとめられない際物だったのである。ゆくゆくはトスカナ伯領をものに出来るとあって、相手の歳には目をつぶった青年も、若僧扱いされ、

政務には一切口をはさませまいとする姉女房の仕打ちに、いたたまれなくなつたものらしい。マチルデは先夫のロートリンゲン公を追いだした実績もある女傑、このたびも亭主の方が手ブラで実家にもどらねばならない。

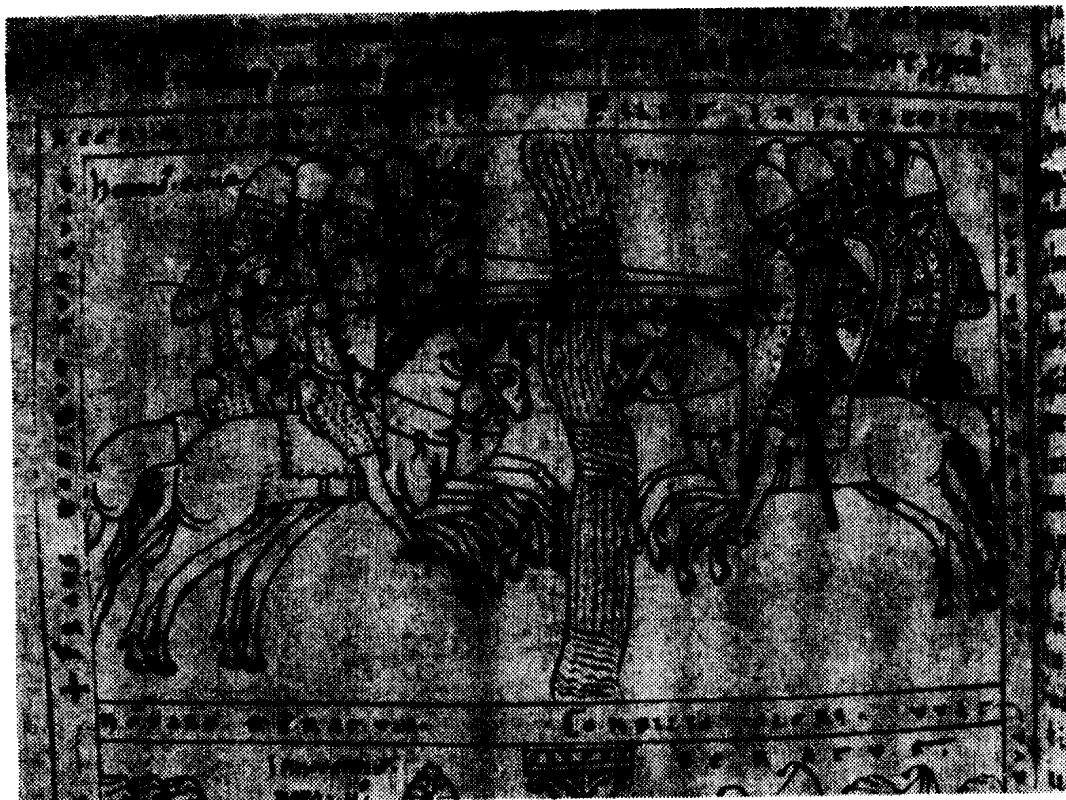
息子をコケにされた父親はよほど腹に据えかねたのだらう、主義主張もなくさっさと皇帝派にくらがえしてしまふ。ハインリヒはバイエルンの帰順で、ようやくドイツへの帰路を確保、やがて帝国会議を召集し、長男の廃嫡と次子ハインリヒの国王選出をやりとげる。尚、ひとり身をかこちながら年老いた女伯は、その豊かな所領を教皇に遺贈した。もちろんドイツ皇帝が介入し、この要衝の地をめぐる覇権争いはさらに尾をひくこととなる。いわゆる「マチルデの遺領」問題である。

ドイツ国王の座にあること五一年、帝笏を握って二〇年、ついにハインリヒ四世の治世も、最終ラウンドを迎えることとなった。長年の闘争に疲れ、気弱になつた皇帝に対し、ますます権威を高めつつあつた聖座は、ひき

つづき破門と廢位の強硬姿勢で臨む。ドイツ国内の反皇帝派が各地で決起するに及び、帝位継承も危しと踏んだ皇子ハインリヒは、父親を犠牲に危機を回避しようとする。またもや息子に背かれたのである。長男で懲りた父親は、次男の国王就任にあたって、自分の存命中は政に手を出すなどの誓約をとっていた。聖座を敵にまわした父帝の失策をとくと認識していたハインリヒは、教皇の意を得るため、皇帝との誓約の一件はいかがしたらよろしいものでしょうかと、お伺いをたてる程の低姿勢で臨む。もちろん貌下からは、破門を受けた者に対しては誓約の義務なしとの有難いお言葉が下る。国王のこうしたしおらしさは、やがてまったくの政治判断だったことが明らかとなるのだが。

皇帝と国王が対決したこのドイツ内乱劇で、バーベベルク家六代目当主レオポルト聖伯は、皇帝追落しの主導権を握り、政権交代をやりとげたばかりか、辺境伯家をついに帝国列強の一員につけくわえてしまうという離

れ業を見せてくれる。



レン川の合戦オットー・フォン・フライズィングの『年代記』挿絵

西歴一一〇四年、父と子はそれぞれに手勢を率い、オーバー・プアルツのレン川をはさんで向いあう。バーベルク家の当主は、ボヘミヤ公と並び、皇軍の主翼を構成していた。ところが合戦を控えた前夜、突如として聖伯は義兄のボヘミヤ公ともども、自軍をまとめ戦列を離脱してしまう。この結果、皇帝は戦わずして敗走。粘りにかけては無双の強さを誇った皇帝も、この痛手からは立直れなかったのである。

戦線離脱の工作は、国王の側からなされていた。国王ハインリヒが辺境伯に約した最大の恩賞は、妹の皇女アグネスだった。この女性、ハインリヒ四世に目をかけられたシュヴァーベン公フリードリヒ・フォン・シュタウフェンに嫁し、ふたりの男児をもうけていたが、丁度このころ夫に先立たれ、ひとり身だったのである。聖伯はこの皇女を娶ることにより、新皇帝ハインリヒ五世とは義兄弟という立場にたった。いやいやこの女性、その程度のもを持参したのではない。兄ハインリヒ五世が享



年三九歳の若さで、世継ぎのないまま他界した時点、ザリエル王家の青い血は、ただ彼女のからだを通してのみ流れることとなったのである。血統権原理は万能でなかったにしろ、それでも貴き血の連続性に途方もない幻想をいだいていた時代だったから、アグネスの胎内から出た子供こそ、帝位をうかがうに最もふさわしい資格を有していることになろう。事実、フリードリヒ・フォン・シュタウフェンとの間に生まれたふたりの男児は、シュヴァーベンの地で成長し、やがて帝位争奪戦に打ってでる。兄の方は叙任権闘争の後遺症で選挙に破れたが、弟コンラートは次回の選挙で雪辱をはたし、ついにシュタウフェン王家を創設。このコンラート三世は後継者に甥のフリードリヒ、つまり兄の子を指名する。これが後のフリードリヒ一世赤髭帝だった。まさしく皇女アグネスを通して、シュタウフェン家の雄飛が始まったわけである。

オーストリアのバーベンベルク家にとっても、彼女は

得難き珠玉ともいうべき存在となった。血筋の高貴さに加え、女の豊穣さに恵まれていた皇女は、聖伯に嫁したときすでに三〇歳を越えていたが、それでも一八人の子供を生みおとし、一人を育てあげる。辺境伯家は安泰だった。しかもアグネスの子コンラートが三世として玉座に迎えられたとき、バーベンベルク家は帝国諸侯のなかで、皇室との結びつきが最も強い一門となったのである。

聖伯の統治下、家領の増加にもめざましいものがあった。バーベンベルク家はレオポルトの長子アーダルベルト名儀で、ついにパッサオ司教座系列の教会や修道院のフォークタイを獲得。これは聖伯の最初の結婚によってもたらされたものらしい。つまり皇女アグネスを迎える前に、かれは現在の上・下オーストリア州ざかい、マツハラントに根を張っていたペルク家の娘を娶っており、この一族の所領と権利が、彼女を通して息子アーダルベルトに流れこんだというわけである。ヴィーンへの進出

もやはり、聖伯の母の実家、ラーテルンベルク・フォルムバッハの消滅によるとの説が強い。

家領拡大はややもすれば、刀を振りまわしての荒々しい事業だと考えられがちだが、ヨーロッパの伝統は決してそうしたものではない。武力行使はむしろ邪道であり、別のもっと確実で、しかも合法的な道が敷かれている。血縁を盾にとっての相続権の主張だった。血縁にもとづく相続権は、個人の意志より重視される傾向があったとみられる。ところがこのふたつの権利、簡単に折りあいがつけられる性質のもでないことは明らかで、遠い縁者まで及ぶ権利を振りまわされれば、個人の財産処分権など存在しなくなってしまう恐れがある。こうした微妙な権利関係の領域に浮上し、問題を深刻化させているのが、寺社への寄進といった行為である。我身の衰えを感じ、子供もないというような者が、気のくわぬ縁者に財産をとられるより、むしろこれを寺社に奉納してしまおうとの気をおこしたところでなんの不思議はない。

それに信仰心の篤かった時代でもある。財産をそっくり教会や修道院のために投げ出す者も結構多かった。はためには実に奇抜な振舞にうつるこのような行為も、親戚縁者にはおもしろくないこととなる。黙っていてもじきに転がりこんでくるはずの分配分が、教会に横取りされてしまうわけだ。こうした場合、相続権をもちだして圧力をかけたり、事後返還をとりつける事態も少なくはなかった。

レオポルト聖伯が建立したとされる、ヴィーナー・ヴァルト山中のクライン・マリアツェル修道院をめぐりて、この種のトラブルがあったらしい。実はこの修道院設立に私財を投げだしたのは、シュヴァルツェンブルク・ネスタハという一族出身のふたりの兄弟だった。ヴィーン盆地に流れこむトゥリースティング川の上流、ノスタッチに城をもつこの一族、ハインリヒ三世帝から王領地を拝領したほどの名門だった。信仰心からか、それとも嗣子に恵まれなかったからか、兄弟は僧院建設

を思いたち、このために城の周辺はもちろん、ヴィーン盆地一円に散在する畑、ブドウ山、森林、草地を使おうとする。ところが建立発願書と由来書きには、兄弟の名前が消え、施主はレオポルト聖伯、修道院のフォークタイもバーベンベルク一門のものとなっている。文書には「躊躇する者ら」に先んじて、聖伯が事業を推進したと述べられているにすぎないが、史家は母親イターの権利をもちだし、レオポルト三世が成果を横取りしたのだと見ている。この件に関し、かれは三度も聖職者と地元有力貴族を召集し、確認をとっており、この入念さはかなり強引な横車を押したことの証左でもあろうか。シュヴァルツェンブルク・ネスタハ家は、この兄弟の代で断絶している。

聖伯夫妻はクロースター・ノイブルクに、宮殿と修道院を造営し、さらにヴィーン盆地を眼下にみはるかす山頂、現在レオポルトベルクと呼ばれているカーレンベルク山に城を築いたとされる。クロースター・ノイブルクの

聖堂に関してはアグネスの「ベール伝承」が名高い。それによれば、あるとき聖伯夫妻はカーレンベルク城の一室で、教会建立の話をしていたという。突然一陣の風が吹きこみ、アグネスのベールを空高く巻きあげる。ベールは美しく輝きながら空を舞い、はるか下の森のなかに吸いこまれていった。それから九年のち、聖伯が森で狩りをしていると、猟犬がしきりに吠えだす。その方向に駒をすすめたところ、一本のみごとな接骨木よせりこに、その昔風にさらわれたベールが色褪せもせず懸っているではないか。これぞ神慮のしからしむるところなりと、聖伯夫妻はその場所に聖堂建立を発願したのだった。これは一四世紀後半期から流布しはじめた開山縁起である。クロースター・ノイブルクの地所は大部分購入されたものらしく、その際代替地用として各地のバーベンベルク家領が放出されている事実もある。しかしこの一帯、話のように森だったわけではなく、とりわけ接骨木が生えていたことになる高台は、ローマ軍の要塞跡だった。す

でにこの頃、古いローマの城砦跡には、さる有力な豪族の「新城」<sup>ノイブルク</sup>が作られており、発掘調査では教会らしき遺構も確認されている。

一一一四年礎石が置かれたとされる聖堂建立に、レオポルト聖伯はおびただしい私財を投入した。大盤振舞いの寄進には、この事業に賭けるかれの意気ごみの程がうかがわれるが、それもそのはず、聖伯はゆくゆくここを、辺境伯領の総本山にしようと考えていたらしい。その為にかれは財政的な援助だけでなく、息子のひとりを中心に遊学させ、将来の司教にふさわしい経歴をつませようとした。聖伯と皇女との間に生まれたこの息子が、

中世最大の歴史哲学者とされるオットー・フォン・フライジングだった。オットーは教会刷新の運動に共鳴し、改革派のなかでも厳しい戒律で知られるシトー教団にはいり、修道院長を経てフライジングの司教となる。

聖伯の期待に反し、クロースター・ノイブルクへの司教座招来は成功しない。ザルツブルクとパッサオ司教は、



レオポルト三世伯、その息子アーダルベルト、オットー。背景はクラインマリアツェル、クロースター・ノイブルク、ハイリゲンクロイツ

バーベンベルク家の私教会が、余りに力をもつことに難色を示す。折しも両司教は、教会刷新の運動を押しすすめている矢先で、施主一党の私教会は根本的に改革運動

とは嘯みあわなかつたのである。結局、聖伯の方も一門の私教会にして領邦教会という壮大な構想を断念し、聖堂の完成も近ずきつつあったとき、ここをアウグスティヌス修道会にまかせてしまふ。献堂式は一一三六年ザルツブルク大司教、パッサオ、グルク両司教を迎え盛大に祝われた。聖伯は決して改革運動に理解がなかつたわけではない。メルク修道院は教皇に奉納したし、オットー・フォン・フライジングの働きかけで、ヴィーナー・ヴァルト山中にハイリゲン・クロイツ修道院を作っている。「布教と労働」をモットーとするハイリゲン・クロイツのシトー教団は、ヴァルトフィアテルの中央部、ツヴェトゥルの地にも招かれ、クエリンガー家の支援を受けながら、北部辺境地帯の開墾に大きな貢献をしたのだった。

辺境伯レオポルト三世は、帝国レベルでもずばぬけた声望を得ている。なにはともあれ、かれは皇帝ハインリヒ四世の女婿、五世帝とは義兄弟の間柄だった。父帝を

葬りさつたハインリヒ五世も、当初聖座に示した神妙な面持ちは、政権をとるまでの便法、すぐさま父帝にならない、帝権擁護のために教皇と衝突せざるを得ない。しかし、五〇年もの長きにわたる抗争に、双方は互に歩みよる必要を認め、ようやく一一二二年の協約となる。このウォルムス協定、根本問題をなにとつ解決していかない不透明な妥協の産物だったが、ともかく両者はそれぞれ相手の顔をたて、戈をおさめることにしたのだった。この協約を成立させるにあたり、聖伯は教皇と皇帝の仲介役を演じたとされている。

西暦一一二五年、ハインリヒ五世の崩御をうけ、新しい国王の選出が問題となつたとき、レオポルト聖伯はこれに推挙された三名のうちのひとりであった。しかしかれは辞退し、結局シュヴァーベン公フリードリヒとザクセン公ロタールの勝負となる。フリードリヒはアグネスがシュヴァーベンに残してきたふたりの男児のうち兄の方だった。したがってザリエル家の皇女につながる人物

が、このとき二名も国王選挙にノミネイトされたわけである。アグネスの長男は敗れた。教皇派が勢いを得ていたこの時節、ザリエル王家の血は忌避されてしまったのである。

聖伯は立候補を辞退するにあたり、自分の年齢と子供数の多さを理由にあげたという。年の方は五十路を越えたばかりで、本心とも思えないが、我が子たちによる跡目争いの懸念は、不幸にも的中したようだ。聖伯の晩年、幼少から後継者と目されていた先妻の子・アードルベルトは、いつの間にか表舞台から姿を消し、アグネスの長男ハインリヒも何故か当初家督を相続できず、次男のレオポルトが四世として、辺境伯家の総帥におさまってしまふ。こうしたとても尋常とはいえない家督相続には、皇女アグネスの意向が強く働いていたとしか考えられない。

辺境伯職にあること四〇余年、クロースター・ノイブルクの献堂祭から幾ばくも経ずして、聖伯レオポルド三

世は狩猟中不帰の客となる。さる史記に殺害を仄かすような表現もみえ、家長の座から締めだされた先妻の子と聖伯の死を結びつける説も出されたが、父親殺しの大罪はとうてい隠しきれるものではないだろうとされ、クロースター・ノイブルクに安置されていた遺体の調査でも、殺害に結びつくような傷痕は発見されなかったという。

レオポルト三世は添え名でも明らかなように、後年ハプスブルク家のフリードリヒ三世帝の尽力で、教皇庁より聖者に叙せられた人物である。かれはオーストリアの守護者とされ、かの聖コーロマンを凌ぐ地位を得ることとなった。

——以下次号——

(はば たけし)